

く山の向こそ文珠の淨土なるら  
め(以呂波)

〔文珠〕文殊師利(Sanskrit)の略、智慧門を司る菩薩である。頂に五髻を結び、右手に劍を執り左手に書卷を持ち、獅子に乗り、或は蓮華上に坐してゐられる。蓋し五髻は大日の五智を表し、劍は智慧を表し、獅子は智慧の猛威を表したものである。

〔文珠の淨土とは、文殊菩薩の居處五臺山(清凉山)をいふ。菩薩經に菩薩住處品に、「東方有菩薩住處、名清凉山過去有菩薩常於其中住彼現有菩薩、名文殊師利有二萬菩薩、當爲說法。」語出石橋に「向ひは文殊の淨土にて、常に笙歌の花降りて。」「ちごもんじゆ」をいふ。

もんじゆほうじゆ 平泉の文珠寶壽  
もんじゆほうじゆ 千日潔齋して鍛つたる利劍の  
験(編山姥)

〔文珠寶壽〕即神皇の頃陸奥平泉の刀工である。源満仲の爲に八幡宮に祈り、犀切陸九の名刀を作つたこと平治物語に見えてゐる。

もんち この軍介を東へ遣りほつかりすかたんさせんと、兎角汝が言葉とはもんちもんちに出る合點(隅田川)宵のうつり香燻きしめて、葦まで寝るを作法にて、他と

もんちの揚屋町(百目曾根)  
〔門地門閤の義より門地門地を家家の流儀儀の意にとり、轉じて物のかなたにまたに運ぶことなり。〕裏障 あへこへ。和漢遊女答氣(享保二年刊)四の巻にも「おつしやるやうにするが、お主にすねたりお心に違つたりするのでござんす、ぬし様の思召ともんちにするがとりもなほさすわしがするぬのぢやが合點がゆきませぬか。

もんちやく 常盤様はお氣合が悪  
もんじゆほうじゆ やいとばし

いとて、床も離れず薬もんどぢやく、いっ浮き浮きともなされぬ(女護島)  
〔洞書〕洞書と書き、紛争の義、轉じて親しみ合つて離れぬ意に「ひごめやや」その條を見よ。「ごめややくちや」その條を見よ。と同義又は同條の語である。

もんちゆうじよ (女夫池)  
〔間注所鎌倉幕府に置かれ、室町幕府にもあつた。許備遺失等の審判、領地の境界論、貸借等に關する訴訟を掌る役所であつて、職員に執事・寄人などがあつた。〕

もんづかき (酒呑童子)  
〔主水司〕もひとりつかまことむが故實である。大寶合に「掌進取水雜衛事」と見え

もんば 天道知らずのやくたいなし、もんばぢやと呟けば(唐船癖)  
〔まんばらう(孟八郎)の詠略であらう。亂暴な野郎の意。碧巖集第二十八則裏語に、「孟八郎作什麼。」「もんばに似た支那語に「ワラン(Warun)」といふがある。人を罵る語で、馬鹿文は馬鹿野郎の意にいふ。〕

もんび 繁昌の地の紋日さへ、更けて淋しき五月間(生玉)二階座敷の三味線に、ひかれて立寄る客もあじ、紋日遁れて顔隠し。仕過しせじと忍び風(天網島)揚屋の餅搗。

紋日の長持 お客に太鼓持(夕餅)  
〔紋日〕ものび(物日)の轉である。紋日と書くはその音によつた當字である。祝のある前日を物前などといふ物で、紋日即ち物日は祝の日をいふ。遊里の紋日は所によつて違へども、概して正月初の敷日、二月初午、春秋の彼岸、七月盂蘭盆、十一月保佛、十二月餅搗節分、庚申日などは、何れの節でも紋日とし

たのである。西瀛與志撰 茶碗限立顔(寶永五年刊)三之巻に「紋日年中行事。正月元入・中日三日月・十五日・十六日・二月彼岸入・二月日けちごわん・十五日・二十二日・三月三日・四日・四月八日・五月五日・六月・六月朔日(愛染)・二十日(稻荷)・二十二日(座懸)・二十五日(天徳)・二十九日(住吉)・七月十五日・十六日・八月十五日(名月)・彼岸入・中日・けちごわん・九月九日・十日・十二月(名月)・十月十四日(千夜)・十一月・十二月すとり・十三日(はじめ)・庚申のけて年中の紋日十三日」と見えてゐる。これは大阪師の紋日を擧げたものである。遊女は馴染客にねだれて衣裳を作り、紋日に着師つて全盛を競つたものである。また紋日には遊客から揚屋・遊女などに祝儀を遣つたのである。(色道大鑑)

〔延寶年中 時節門に「紋日。物日の事なり。成。寫本。〕  
〔家家の紋のやうに足まりたる事なるに依て紋日といふ。異本洞房語關上に「紋日。小袖の紋は五原に於ては、五節句の祝の日を紋日といふ、吉原にては、紋日といふ、紋日は京の言葉と見えてゐる。もんびの語義の説いかが。夕霧阿波渡のこの文に「もんびの長持」とあるは、遊女が揚屋へ招かれた時、女郎屋より長持を持たせやうとある。蒲標(寶曆七年刊)長持運送並調度通用の條に、「一太夫は大大中小三通り、各女郎屋の定紋をしるし、内には夜具並料紙箱亂箱其外手箱等の物品出入、女郎極まりたる揚屋へ女郎屋より持せやう也、此長持往古より有來る事なりしに、享保九辰年額換して、今は大風呂敷に包み揚屋へ通ふ也。

もんづかき (酒呑童子)  
〔主水司〕もひとりつかまことむが故實である。大寶合に「掌進取水雜衛事」と見え

もんば 天道知らずのやくたいなし、もんばぢやと呟けば(唐船癖)  
〔まんばらう(孟八郎)の詠略であらう。亂暴な野郎の意。碧巖集第二十八則裏語に、「孟八郎作什麼。」「もんばに似た支那語に「ワラン(Warun)」といふがある。人を罵る語で、馬鹿文は馬鹿野郎の意にいふ。〕

もんび 繁昌の地の紋日さへ、更けて淋しき五月間(生玉)二階座敷の三味線に、ひかれて立寄る客もあじ、紋日遁れて顔隠し。仕過しせじと忍び風(天網島)揚屋の餅搗。

紋日の長持 お客に太鼓持(夕餅)  
〔紋日〕ものび(物日)の轉である。紋日と書くはその音によつた當字である。祝のある前日を物前などといふ物で、紋日即ち物日は祝の日をいふ。遊里の紋日は所によつて違へども、概して正月初の敷日、二月初午、春秋の彼岸、七月盂蘭盆、十一月保佛、十二月餅搗節分、庚申日などは、何れの節でも紋日とし

やいとぎやう まそつと遊んでやいとぎやうの相伴せうか(今宮)  
〔灸箸(灸)をまたたけに食ふこと、(餅)を菜んで炒つと熬木と熬豆(黒豆を熬)とを交へ、これを山椒または生薑を加へ、砂糖で固めたものをいふ。關西地方でこれを「おとり」といふ。今宮心中のこの文に「それ二郎兵衛菓子盆、熬豆、山椒に」とあるは即ち灸箸のことを云つたのである。松屋筆記(卷二)「灸治するるとき灸より血出で進る事あり、此人神のめぐりにあたれる也、如何なる藥を用いても不効必ず死す、但干飯と熬豆を煎りたるを嚼みて傳くれば忽ち癒ゆ、實に奇方也、古來より灸箸に豆米煎を用ゆるはこの用意なるべし。」「やいとばし」の條を見よ。

やいとのはば それ二郎兵衛菓子盆、熬豆、山椒に、小蒲團敷けと、肴くるりと灸のばば、前を後に日は見えす(今宮)  
〔灸箸〕やいとばは焼處の義、灸をいふのばばは附添へたまで意味があるのではない。「ころえたるべのばばま」を見よ。

やいとばし 前を後に日は見えす、何をせうとも顔くすりくすりの灸箸、痴話の便りの薄煙(今宮)  
〔灸箸〕灸文を挟んで灸する處に肴着せしめるに用ゐる箸。



【しばといや】

\*やうがう さながら神も影向し、佛も来迎あるばかり(蓮香童子) 福神

だちの御影向、一に市姫辨財天(靈女) 諸願も成就の神影向の杖とかや、請・副は残人の菊籠の下に手折りて(聖徳太子)

〔影向〕本體あつて、其影をある一面に對向せしめるの義。神佛の影の應現することをいふ。〔影向の杖〕とは、立花法式の語であつて講をいふ「うけ」を見よ。

\*やうきひ おれば悪う合點して楊貴妃の幽霊かと思つて怖かつ

〔楊貴妃〕名は大真、貴妃は女官の名、絶世の美人である。唐玄宗皇帝天寶四年宮に入る。帝・貴妃を寵愛して政務を怠り、遂に安祿山の亂を誘致して、天寶十五年貴妃馬嵬驛で殺された。

\*やうきざくら 異國の美人と名に

高き楊貴妃櫻を勸請ある(賀古教信) 〔楊貴妃櫻〕櫻の一種。俳諧時記茶室に「楊貴妃櫻。興福寺の僧玄宗といふもの愛せし故名とす、一説に此花大輪にして紅色を含み海棠に似たり、故に海棠の睡りといへる故事より名とす」とあり。松岡玄蓬撰「櫻品」に「楊貴妃。恰爾齋曰、小江戸に似て重瓣中輪也、花鏡の底あかし先白し云云」とあつて、この櫻のことが詳説してある。

\*やうきやう 二十四孝の楊香は、孝

行の徳によつて自然と近れし惡虎の難(國性蓮) 〔楊香〕支那二十四孝の一人である。十四歳の時にその父が虎に啣られたのを、楊香奮進して虎と相ひ、以て父を救つたといふ。二十四孝光悦本に、「楊香はひとりの父を持つて

り、或時父と共に山中へ行きしに、忽ち荒き虎にあへり、楊香父の命を失はんことを恐れて、虎を退去らんとし侍りければも叶はざる程に、天の彌縫みを頼み、鹿鹿は我が命を虎に與へ、父を助け給へ」と志を深くして祈ければ、さすが天もあはれと思ひ給ひけるにや、今まで猛き形にて取食はんとせしに、虎俄に尾をすまて逃げ退きければ、父子共に虎口の難を免がれ、恙く家に歸り侍となり、是偏に孝行の志深き故にかやうの奇特をあらはせるなるべし。

\*やうきゆう (五人兄弟)

〔楊弓〕玩具の弓で、長さ三尺ばかり、坐して射るもの、的の距離七間半の定めであるといふ。庭訓往來に永井和彌の註に「楊弓。或説云、楊貴妃遊庭用小弓、人は謂「楊弓」的四方に桐木作也」と見え、伊勢貞丈の説に「楊弓は唐の楊貴妃より始まるといふ説あれども出所詳ならず、其始を知らず、本は小童の戲に楊の小枝を弓に作つてもあそびとせしより起りたる事などにもやあるらむ」と見え

様子ある夫婦 彦九郎殿とは様子ある夫婦ゆゑ、嫁入の時の嬉しさは譬へん方もなかりしが(堀川波敷)

妙馴染の時から嫁付て夫婦となつた者。 \*やうづつ 螺鈿の手笛にやうづつ 一管(孕常盤)

「やうづつ」とも書つてある。横笛をいふ。蓋し「わうてき」(横笛)は王敵に通じざるを忌みて「やうてき」というたものか。義經記に「横笛」と名づけたるものやうてきを持。『隆慶記』に「横笛をやうてきと云ふこと、或人云昔朝鮮人對馬に來て横笛をやうてきといひしを對馬人開傳へて今にいへるなり」。山田以文撰・鏡所談に「やうてき。わうてき(横笛の音)と云へば其音王敵に通ずるを以ての義歟、猶後考を俟」。

やうばい 銀杏・金柑・楊梅・寒梅(振袖始)

〔楊梅〕「やまもも」の漢名、本邦陸地に自生する常緑喬木で高さ二丈に及び、初夏褐色の小花を雌雄異株に開き、秋紫赤色で多数の乳頭状突起を有する球形の果實を結び、食用に供せられる。 \*やうらく 碌碌の環珞・眞珠の華鬘 (松風) やうらくさいいな人の御衣か



〔環珞〕珠玉を連ねて身裝の飾とするもの。西域記に「在「頭日環」(在身日珞)」「環珞細腰」の細腰は、地の細かくしなやかなもの。謡曲「春日禪神」に「環珞細腰の衣を脱ぎ」。 \*やがらせめ 少しもあらがば、矢幹責鐵砲拉ぎ(安夫迪)

〔矢幹責鐵砲〕問するに矢幹を持つて打撃すること。 \*やかん さもあれ狸野千のわざもあり(反理香)

〔野千〕狐の異稱。延寶八年刊の節用集大全に「野千に「キツ」と振假名が附けてある。 \*やき 暫くあつて黒栗毛の其たけやきばかり、電光畫いたる蒔繪の鞍(源義經) 外道毛・婆羅門栗毛、れ(これへ、あつと答へて引出す、其丈八寸餘り(倉橋山) 八寸馬は身長四尺を標準とし、それ以上を何寸といふ。八寸は即ち身長四尺八寸ある大馬である。 \*やきり 所所の井榭矢切を附けて、横矢繁くぞ構へける(用明天皇) 入道・門の矢切に立つて(靈女) 安宅

の關二重の矢切二重の柵、貫の木海老錠しつととおろし(藤樹)

矢切または矢雄など掛けども、蓋し屋限の鏡であらう。母門などの上に作り附けた袖垣をいひ、忍返のことである。太閤記「山中の城落去の條に「天杉の本へ走り着き、矢切の上へ勅兵衛騎乗上り、内を見とみ候へば」關八州古戦録「小田原沼田窪下城黃の條に「攻寄せ矢雄に火矢を射かけしに、城兵を酒さんとし」男色大徳巻二、傘持つてぬめる身の條に「纏八拍の楯矢切を飛越す面影を見付け給ひて」。 \*やく 文には嘘を書き習ひ、牀にて人をやき習ひ、ねぶたたくとも居睡らず(百日曾我)

〔睡〕人の心にかたみ暖まれるやうにする。蓋し寝に入れば暖けるから、寝をお氣の意にとつて、懶くをお氣に入るの睡語としたのである。 \*やくしによらい おろす駕籠から

やくしと出た炮烙頭市の醫者殿は、薬師如來の引合せつば屋の客と脈をとる(女腹切) 十二日ム薬師如來の縁日(女腹)

〔藥師如來〕藥師琉璃光如來の略。大醫王佛ともいひ、東方淨瑠璃國の教主である。立像も坐像もあつて、瑠璃の蓋を持つて醫藥の器を掌られてゐる。毎月十二日は藥師如來の縁日である。南留別志に「八日十二日は藥師の縁日といふは、やといふ訓の八に通ふ十二神とによりてなり」とありて、十二神は勿論藥師守護の十二神將のことであるが、この説は非であつて、十二日を縁日とするは藥師如來十二の誓願の縁に據つたものである。長町女二切のこの文に「蓋屋の客といへるは、藥師如來の瑠璃の蓋の縁より、蓋屋といひ、又脈を取らんとあるも醫者の縁によつたものである。





方、思ひ思ひの願によつて(五人兄弟) 兄祐成。時致は矢立の杉の奇瑞を蒙り(加増曾我)

〔矢立杉〕相州鶴岡八幡宮の神木である。風流御前二代曾我實永六年刊五之巻にも、相州に矢立の杉とあり、心中に習みある者又心がけの待この杉の枝に矢を放し、とまるもの其願成就せぬといふことなしと見えたる。曾我五人兄弟のこの文は、その昔鎌倉武士ども平權頭征伐の出陣に云云とあるべきであらう。

＊やたのかがみ 久方の日の神の御影映りし八咫の鏡、これを見ること吾を見る如くせよとの神勅にて(振袖始)

〔八咫鏡〕三種神器の一。村上天皇の天徳以後内裏焼亡したと散回、神鏡も其災に罹つた時のことを大鏡裏書なる村上天皇天徳御日記に記して、「圓規無虧」と見えたる。これは崇神天皇御模造の鏡ではあれども、八咫鏡の圓形であることはこれによつて證される。咫は支那尺八寸の長さをいふ。親指を内にして手を並べた形を八咫と云つたのであらう。八咫鏡を八花形の鏡とするのは誤であらう。天照大神御手に寶鏡を持ち給ひ、皇孫に御授けになつて、「吾兒視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡」と宣はれたことは神皇正統記にも見えたる。

＊やつか 笹廻り 太く矢束も抜群(會稽山)

〔矢束〕矢の長さは束(手)によつて計るより、單に矢のことを矢束ともいふ。保元物語、軍評定條に、「弓手のかひな妻手に四寸のびて、やつかを引くこと世に超えたり」。

やつがしら 今日晝過ぎ八つ頭、鎌倉より二の宮の太郎殿といふ人早

打のお使(會稽山) 〔八つ頭〕八つ時午前または午後(二時)の上刻(とき)の條を見。

八つか七つの芝居 〔二つか〕竹田か云云を見よ。

やつかあたま 奴あたま振りながら、母襟怖いと泣きぬたり(重井筒) 〔奴頭〕頂額の髪を剃落し、僅に頂後の髪を残して髪を短う結うたのをいひ、下部下男などの結髪である。

やつし やつしは甚左衛門・幸左衛門が思案(と女殺) 〔僧形〕の略。芝居にて遊治郎又は美男子に扮するものをいふ。

やつち 三味線の革八乳にも負けは致しませぬとぞ申しける(松風) なつく八乳の繼三味線、心くらべの連弾に、思ひの色をしのびこま(安腹切)

やつまたのおちろ 出雲國簸川上鳥上嶺に億萬劫を隠れ棲む八岐の大蛇と申す一身八頭の大蛇奪取り(振袖始)

〔八岐大蛇〕一身八頭の大蛇。日本書紀神代卷に、「葦叢鳴尊自天而降、到於出雲國簸之川上」……有八蛇、頭尾各有八岐、眼如赤霞、齒如松也、於背上、而蔓延於八丘八谷之間、及至得頭各一槽飲醉而睡、時葦叢鳴尊乃拔其所帶十獨劍寸斬其蛇、至尾劍又少缺、故劍割其尾、蛇之、中有一劍、此所謂草薙劍也(序云、太古の世は人智簡單素朴で、草木

皆物を言ふなどと、人類を動物植物の名などに喩へて呼んだことが多かった。八岐大蛇は八人組の惡徒を喩うたものであらう。

やつまと 舞樂蹴鞠は珍しからず、笠懸八のなどを御覽あるべきか(虎が鷹)

〔八の〕八所に的を立てて往來馳射するをいふ。まほし打草子に、「御門には十町の馬場をやつて二町をばのけばと名付、八所の的を立ててあそはすをば八つのと名付けて、これは公卿殿上人のわざ、かみのまへは三ちやうに馬場をやつて、三所の的を立ててあそはすをば八所の射之、高位體也。」

やつめらんち 八つ目わらんちの徒歩跣足(井筒) 頭陀の袋麻衣、鐵鉢を御手に据ゑ、八つ目の草鞋召さるれば(孕常盤)

〔八目草鞋〕履師工隨筆にも見えて、修勝者などの履く草鞋で、乳が八つあつて、八葉蓮華に象つたものといふ。

やどちや 十日許り以前には、是へ移り即ち今日宿茶と申して、家主始め相貸家中へ酒をのみ約束(蛙合戦)

〔宿茶〕宿を茶と出する義、轉居した時家主や隣家の人を招いて饗應すること。引起振舞、やどまりかなもの 矢止り金物・押附の板(發傳・高紐(女補))

〔矢止金物〕道の胸板の金物をいひ、矢を受け止めるよりの稱。

やどや 道中は線出しの浮き歩み、やど屋入の飛び足、座敷は抜き足静かに(吉野忠信) あとがやとやのいたみ(いけ田永朔日)

〔宿屋〕やど(宿)ともいひ、揚屋(その條を見よ)をいふ。色道大鏡卷一に、「宿屋。同じく揚屋のこと也、をかしき名目なれども、これも揚屋におむけ用給の詞也、また揚屋といふ。心中双水明日のこの文については「あとがやとや」の條を見よ(序云、宿屋を旅人宿にもいふはいふまでもない)。

＊やなぎ 柳の髪を何故に、浮世恨みて尼が崎(歌念佛) 町の幅さへ細細の、柳腰柳髪、とろりとせいも種油(女殺) 柳の腰は細くとも心は太き女武者(三國志) 解くや柳の眉れかき、はなび紐解け亂るれど、誰かば我を慕ひつつ(小栗判官)

〔柳〕柳のたをやかなるがやうに、みやびやかになやかな貌をいふ。

〔柳の髪〕は、女の長く美しい髪を形容していふ。破枕集(實文三)僧之の句に、「松にけふは木夫鬢かよ柳がみ。砂金袋(明鑑三)清貞の句に「風でわくる柳の髪や吹返し」

〔柳の腰〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

〔眉〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

〔眉〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

〔眉〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

〔眉〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

〔眉〕は、ほつそりとした美人の立姿をいふ。溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如波眼、嬌嬌似柳腰。群芳語、細腰膩嬌媚、調之柳腰」

〔柳の眉〕は、美人の眉を形容していふ。白居易の長恨歌に「芙蓉如面柳如眉」

**\*やなぎ** 關白重祿を刺を蒙り、柳の

五衣着たる官女を誘ひ(栞符)

〔柳表の白くて裏の青いのをいふ。夏季はこれを卯の花といふ。この文に五衣とあるは、女官などの衣の五枚重ねたやうにしろいのでその重ねやうに櫻重なり梅重なりなどの名目がある。また五重でなくとも多く重ねたのを五衣といふこともある。〕

**やなぎすすたけ** たよたよと召した

姿の柳煤竹藤鼠(融大臣)お内儀は結構者、やなぎすすたけにやつてちやが(重井筒)

〔柳煤竹〕染色の名、竹の煤けたやうな赤黒色を煤竹といひ、煤竹に青みの加はれる色を柳煤竹といふ。諸藝小鏡貞享三年刊)萬葉物の條に「すす竹下地をぬすみに染て、上をも皮のせんじ汁にて染る也、色をくしたき時は下染をこうし、上染をいく度もすべし、ほす時にしぼるべからず、むらに成也」西鶴の胸算用・卷三に、「おまつお仕着は定めて柳煤竹に亂れ柄の中形でござろ。融大臣のこの文は、たよたよと柳の姿を、柳煤竹の染色名にいつづけたもので、染色蓋の眼(まぶら)春の空色に云云(と)には「召した姿の柳染、藤を煤竹藤鼠」とあつて、柳染と煤竹染となつてゐる。心中重井筒のこの文は、内儀は夫に反抗しないで柳のやうにうけなせし、煤竹のやうに赤黒くなつて働くをきかせたものである。融大臣・重井筒ともにこの文は染物屋の染色蓋である。

**\*やなぐひ** (扇八景)

〔胡蝶〕古矢を盛つて帯びる器をいふ。中古・精巧に作つて扇といふ。胡蝶を器の形に作つたものを盛胡蝶といひ、平たく作つたものを平胡蝶といふ。平胡蝶は多く用ゐなかつた。

**やはた** 野馬臺とやらん唐土の

書に、絲を引いて文字を導き日本の譽をあらはし、蜘蛛かかつて悦

來ると云ふ本文もありと聞く(扇八州) 古には安倍仲麻呂唐してやばたいの詩をよみ、日本の名を揚げしとかや(以呂波)

〔野馬臺〕撰者でない。按じると本邦僧侶の作であらう。撰中に吉備公入唐の時に唐人の才力を試みたことを載せてあるが、この記事も虚構である。この書寛永二十年の刊本は長根歌・琵琶行と合録してある。野馬臺は蓋し大和の音借字であらう。漢書・東夷列傳に「大倭王居耶麻呂國」と見えてゐる。日本紀に「白を」とし、用ゐるから、「白」を「も」とに用ゐたのであらう。今の支那書は耶麻呂を「ええまたう」(Yeh-mat)と讀む。

〔絲を引いて文字を導き云云〕を見よ。  
**やはたごばう** あの旅人は京の八幡の生れやう、足にこんぼの毛がむくむくちや(母波與作)

〔八幡牛〕山田國喜郡八幡山の東の園村から産出する牛をいひ、名物である。雍州府志(貞享三年刊)に「牛、八幡山東園村産物名、專稱八幡牛、園村去八幡半里許、元社家大臣氏之所住也……一説八幡園牛、非園村而社人家園之所産者也。西鶴の萬文反古・卷二に「八幡牛三把」。

**\*やはら** 昔の時よりやはらあてみ

を踏古して(大經師)  
〔柔術〕和訓栞に「やはら。柔術などいへり云云」。

**\*やはらち** (天鼓)(三國志)

〔夜半樂〕雅樂の一、平調樂の曲名。文獻通考に「明皇自州還京、京師、夜半樂、後、故作夜半樂、還京樂」。

**やぶいり** 歸りこんどの敷入は女夫

連でと約束の、盆正月の十六日を待ち樂しめし我我が(今宮)

〔敷入〕奉公人が家主より休暇をもらつて遊樂の故郷に歸るをいひ、盆正月の十六日は敷入の日である。日記紀事・延寶年中成)正月十六日の條に「敷入、今日農工商各遊遊、洛内外男女或到兩親家、又在二親家、或詣寺社、又遊山林、各隨意、是謂十六日遊、又稱敷入、遊無所往之人、則入林野中、而遊樂亦可、一説敷入、元宿人之誤也。奴僕謂暇主人、歸云、汝所之義也」と見え、七月十六日の條に「敷入、洛内外男女遊樂、是稱敷入、同正月十六日、……」と見えてゐる。盆正月の十六日を見よ。

**やぶかのもちつき** 軒に敷敷の餅搗

も、その前垂の名残かと(反魂香)  
〔敷敷の餅搗〕海野軒端に敷敷とあれどもが群集して、寄つたけつわやや飛びちがふこと。

**\*やぶさめ** 笠懸・流鏑馬・犬追物(大猿虎)

〔流鏑馬〕矢馳馬の略稱といひ、或は矢伏射馬の義ともいふ。馬に乗つて馳せながら鏑矢を射ることを射射の一種である。射手に定めて、其裝束は水干・綾袴笠などで、鹿の毛皮で脚部を包み、射標に入つて扇を披いてこれを背後に投げ、同じ矢を番馬に上げて馬を馳せ、第一の的を射て矢を番馬、又驛を上げ鞭を揚げて第二の的を射、又かくして第三の的を射て走る。軍器考・卷四に「流鏑馬の的も方也。其徑一尺八寸、串は三尺五寸又は五尺二寸にもする。上三寸六分許が間に的を挿めて紙袋にて二所を綴ぐる也、大やうは小笠懸の式的如し」。

**やぶしわく** 須磨の一本の松が枝に

五色の花咲出でしと奏聞す、やぶしわかざる恵みのしるし見て參れ

との勅を受け(松風)

〔敷分〕の義。敷は草深き處をいふ。しは、指す意ありて力ある助詞。敷し分かざる恵みとは、いかに草深い敷原をも分隔でなしに調し給ふ恩恵の意。古今集・雜上部の歌に「日的光やぶし分かれば石の上、ふりにし里の花も咲けり」。

**\*やぶすま** 一面に矢換作つて(雪女)

〔矢換〕弓に矢を帯て機障の如く立並ぶこと  
**やぶぢから** 汝も我も若者の十七八のやぶぢから(加増會)

〔敷力〕敷の竹を引抜く程の大力。鷹渡波・重繼の句に「若竹や十七はち敷力」  
**やぼてりがき**  
〔京の吉岡紙子染云云〕を見よ。  
**やぼてん** あのみくつけな野暮天め)そもや一夜も添はれうの女郎、野暮てんの手業に笑止な、ならぬならぬといひければ(虎が歴)

〔野暮天〕と書いてゐるのが多い。不祥。うつ五年刊。第三卷に「やぼてんじんなどいへぬの。但言集解やぼの條に「野暮と野けり、ヤボ助やボテン又同じ、アホウといふ異名なり」と見え、野暮てんの條に「凡てテンと云ふは天上といふ事にて至の義也云云」。按じると「やぼ」は也哉で、「てん」は頂天の義であらう。也哉とは室の篋の也と哉との二義があるのみで昔なほよく出た語で、輦じて、世情に通じないこと、無意味不祥の意をなしたものであらう。鹽尻・卷九十一に「我國今の篋は十七管なるは何ぞや、予曰、十七管といへば、也、也の二義は其管のみにして昔なし、其餘の十五管を以て甲乙兩者の十二調とす、云云」。一説に「やぼ」は野夫であるといふ。

やほやおしち この火繩の火は何に

見ならぬか、聲山立てて町へ聞え、  
下で済まぬ詮議にならば(卯月紅蓮)  
八百屋阿七、八百屋阿七が戀人吉三に逢はう  
として我が家に放火した爲に、酷刑に處せら  
れたことは人のよく知るところである。

やまある 未摘花や山藍の、振出し

染むる雲の袖(融大臣)  
山藍山藍といふ多年生草本  
植物の液汁を以て染めた青色の染色。まづ初  
春の空色に云々をいふ。

\*やまうは 敲き廻りし勢は只山姥  
の山廻り(薩摩歌) 姫君は扱置き、  
たと(和漢三才圖會所載)



山姥

と祝言するとも(反魂香)  
山姥山に棲息する鬼女。謡曲・山姥に委しく  
記してある。

やまかけちゆうなごん 山陰中納言  
の家の切方、料理一通りは承り傳  
へしゆ(書庚申)

山陰中納言中納言藤原山陰を云ひ、光孝天  
皇の時の人、四條流料理の方式の祖である。  
大日本史列傳に、「藤原山陰……仁和二年  
叙従三位任中納言兼民部卿……世傳山  
陰能割魚鳥(時人稱得志丁衛)」。

\*やまがた (用明天皇)  
山に住む賤し人即ち樵夫の類をいふ。和訓  
藻に「やまがた。山賤とかかり、山縣の人と  
もいふ。よはあづまのののこと」。

やまかづら 時折り折りにはやり行  
く、山ぞ伊達者の山かづら、引く  
手かすかず(薩摩歌)

山葛ひかげのかづら(石松の異名。この  
文に「山ぞ」といへるは源五郎と云へ往き  
薩摩の山(山)といふ明に據つたもので、薩  
摩の山をいひ「伊達者の山かづら」といへる  
は、伊達者源五郎の往く薩摩の山を山葛に  
ひかけ、引く手かすかすにひびつて、  
源五郎に懸想する女の歌の意にうたうた  
である。

山木が合戦 頼朝はうづぼ木に軍利  
の工夫を得給ひて、扱こそ山木が  
合戦に命を免れ給ひしも、このう  
づぼ木に隠れたる(冷泉卿)

源頼朝或夜伊豆の目代平兼隆を山木の裏に攻  
めこ之を斬る、後に大庭景親が頼朝を石橋山  
に攻めて之を敗る、頼朝逃れて福山の古木の  
朽穴に隠れた。

やまごかし 奥州の金山賣つたる、  
山賣りの山ごかしとはおれがこ  
と(隅田川)

「山轉」鑛山・山林などを賣つて利を得るやう  
騙し、金を出さしめてその金を著服して盗割  
すこと。詐欺取財。商人家職詞(享保三年刊)  
に「世には金山新田事のない事を、街あり  
きて、人をふづくる山街といふえせ者共あり  
て」手代袖算盤(享保七年刊)に「金銀銅の  
山事をふづくり、材木山を手にし、手足につ  
けてのくを山ごかし申すべきに、何事にて  
もあれ、だまし取にとりたふすを山ごかしと  
ふはらかに、是も理は聞えたり、のぼし  
かけてつきおとすより、かかる名は出来し  
とぞ」。

やまごばう 水腫脹満神、申すに  
及ばぬ鬼の口とつてかも瓜山牛  
蒡(振袖袖)

山牛蒡漢名商陸、山野に自生する多年生草  
本で高さ四五尺に達する、葉は互生し長卵形、  
長橢圓形或は長卵形で大である。花は小形  
白色で總狀花序に排列し、果實は赤黒色の漿  
果である。有毒な地下部を漢方にて水腫・脹滿  
などの療用に供する。

\*やましう おみき過して浮浮と、や  
ましうといへば目が見えず(重井簡)  
茶屋へいきやろが山しうな買やろ  
が(重井簡)

「山州」または「山桑」と書かれてある。お山  
(その條)といふに同じ。色茶屋の勤女即ち娼  
婦をいふ。しうは湯女を「呂州」(その條、  
野郎を「野州」などといふ州に「だち」とい  
ふ程の意をなす接尾語である。

やましゆ やましうを見よ。  
山ぞ伊達者の山かづら  
\*やまたち 幼き身に物具がため、女  
も長刀横たへしはムム例のやまた  
ぢよな(女備)

山立山賊をいふ。徒然草に「山だちありと  
のしりければ……われこそ山だちよとら  
ひて、走りかきつつ斬廻りけるを」。

やまたん 欲界の四王・初利天、夫婦  
枕の夜摩天の契りば抱き合ふと聞  
く(五人兄弟)

夜摩天夜摩は梵語(Yama)である。欲界六  
天の第三天で地上六萬由旬の空處にある。こ  
の天光明赫奕として晝夜の別が無いといふ。  
この文は、夜摩天を夫婦枕の夜にひか

て、夫婦の夜の契りは抱き合ふにいひ續けた  
のである。欲界の四王初利天云々を見よ。

やまとほのめく やまとほのめく藏  
女郎、目録をこそ讀み上げた  
り(蛙合戦)

「やまと」は淨瑠璃語り竹本大和太夫の名をき  
かせたのである。頼城島原駐合戦のこの所を  
出語りで勤めた。種年代記に「竹本大和太夫  
竹本芝居の立物。此人生國は和州原本の人  
なり……今の淨瑠璃を聞くに、おとし一流か  
はり、おみき入にあてな事となさるる故  
見物のうけし、例へて言はば嵐三右衛門仕  
たしに同じ、何所やらびらつてやしやんと  
した所あり、地ごとふしと藝に極じ、うれ  
ひ事あはれに又をかき筋あり、是其身其音  
曲の鮮あるものなり、就中世話事よし、云云。

\*やまのかみ 我も岩木にあられど  
まの、内に残せし山の神、めつたむ  
しやくしや格氣する(開八州)

「山神」妻を嘲りていふ語。蓋し字彙集に「巖  
を「ヤマノカミ」と訓んである。取り亂した姿  
が怪物のやうに醜いといふ意で、妻を嘲つて  
「ふ穢となつたのであらう」といふ一説に妻を臭  
いひ、おくはいろはの内やまけの上にあるに  
よつて、やまの上といふはいろはが狂言「花子  
内」のやまのかみをだまして御を貰うたか  
ら下し賜はりし(嵯峨天臺)

「山鳩色」青味を帯びた黄色の紫色を云ひ、蓋  
草紫草・灰等で染めると云ふ。

\*やまが 珍しいお山ぶ、なたは見  
知つた稻荷殿、妹が病氣禱の爲  
か(女祝)

「やまぶし」(山伏)の略。山に臥し野に臥して  
修行する僧。山居の僧を云うたのが後には専  
ら修驗家一流の禪となつた。天白茶の山伏は





**\*やりじるし** お馬標・鎧標・お駕籠  
押の紋標(薩摩歌)

「鎧標」とは鎌に小巾又は白熊などを附けて、一隊毎に分つて目標としたものなれど、徳川時代には各大名毎に異なるものを用ゐ、行列の中に立てて之を目標とした。

**\*やりて** やりての綱ぢや、羅生門あけてたもといふ(淀鱈)やりてが腰の鍵までも、今朝の祝儀の口明けと笑ひ賑ひのめけり(賀古教信)

「遊手」鴉老、鴉婿なども書いてある。禿や遊女の嫉をなし且つ監督し、又揚屋で諸事の取持をする女、赤御垂をした腰に鞭を用ひてゐた。遊手は幅の利いた遊女の成つた者なのつたのが多い。好色一代女(貞享三年刊)巻六、夜發 (女用訓蒙圖彙所載)

「薄色の前垂、中幅の帯を左の脇に結び萬の鍵を提げ、内腰より手を入れ



後を少し引上りて大方は廣手拭、足音無しののび歩行、不斷作り顔して心の外に恐しがられ、大夫引廻すこと弱き生得をも問もなく驚くなして客の好くやうに持つて奔り、隙なく親方の爲にぶきものとなりぬ、女郎の仔細を知り過ぎて後には遺緒を見始め、大夫もこれに恐れ客も氣を取らる如く思ひぬ、好色文傳授(元祿十二年刊)巻五、文字屋の大夫拍子の起語文の中に、「天職十五はいふに及ばず、假令局遣手、飯焚まで下し候とも少しも厭はず」と見えあるから、遊手は局女郎や飯焚女ほどに賤しまれたものである。西聲撰・

御前御狂言(寶永三年刊)巻之一、西國より上る傾城だねの條に「香車に」やりて」と振假名を附けてある。異本調音語圖に「鎧手。古來名を花車といふ、花に廻るといふ意が、然れどもくわしやと呼は聞え難しきと香車と書かへたり、香車は將棊の駒の一つなれば香車と呼はすてやりてといひふれたり。」(たふてんじんの條の書をも見よ。)

**\*やりぶすま** 此處彼處垣を乗越し切破り、四方に起つて鎧ぶす(三徳志)

「鎧標」鎧を數多立並べたのが換障子の如くなる上りよ。

**\*やる** 今まで立ててし誓の末なんの其やうぞ(小栗判官)

破る。日本紀に「破るをやる」とよみ、土佐日記に「とまれかくまれとくやりてん」と見えである。

**\*やらい** 駕籠やりませう上蔭様、駕籠やらいとぞ申しける(百合老)

「かごやらい」を見よ。

**\*やんす** 八百貫目や八千貫は誓文くつされ利なしでやんすといひけ(大經師)

「ありませ」の約説である。「やす」ともいふ。現今も福山市地方では「さうぞ」であります。「さうちやんす」といふ。

**やんま やんま・蜻蛉** こがね蟲(小栗判官)

「蜻蛉」蜻蛉の大なるもの。橋守部撰・俗語考に「蜻蛉をとんぼとやんまとも云、國にこりにて小なるをとんぼ・大なるをやんまといふ、やんまは八重羽の略、なべて鳥蟲の翼は二つ物なるに、此蜻蛉のみ四つある故に八重羽といふ也。」

**ゆるし** 「うらし」を見よ。

**ゆるぜんぞめ** 赤い天狗に白天狗。ゆうぜんぞめ(天狗達(岡田川))

「うぜんぞめ(友禰染と書くが正しい。友禰染は延寶末に端を發し、貞享頃より漸次流行するに至つた。友禰染襦袢の特長は、山水花卉などを巧に染漬して濃淡優雅の趣味に富み形態種々變つた輪廓中に草花などを配して色彩絢爛、圓滑よく消化されて技巧の妙味を發揮してゐる。友禰染の開祖斎崎友禰は承應三年能登江郷に生れ、加州金澤に出で狩野守景に從つて繪事を修め、京都に上つて扇面畫を描き、更に衣裳の地の染色の上へ細密な形畫を描くを業とし、晩年金澤に歸つて加賀染に従事したといふ。

**ゆえんひけ** あもともふもとの赤松を打割り松の油煙髭(薩摩歌)

「油煙髭」在時、髪は作髭と稱して、油煙をもつていかめしうに髭を描いたものである。薩摩歌(集林)に「類に鬚鬚髭人姿、顔じつめたる奉公人」見え又夕霧阿波鳴渡(集林)に「鬚鬚

のすまかにもなれた髭に入ると思ひよら所をのけて置く」とあるも油煙髭についてうたつたのである。五元集拾遺にも「西風よ奴の髭の流れけり」とあるも油煙髭の流れた奴をいうたのである。

**\*ゆがけ** 元服を祝はんと肌より弓懸を取出し(加増曾我) 肌守は母御前、弓と靱は曾我殿へ、鞭と弓懸は二の宮殿(五人兄弟)

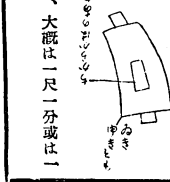
「弓懸」和名鈔に「靱、音讀、和名由美加介」と見えである。「ゆがけ」は「ゆみかけ」の略である。革にて作り弓懸射るとき指に掛ける手袋の爲、歩射は右弓懸をひき、騎射には一具弓懸をさしたるのだといふ。

**\*ゆかり** いづくはあれど曾根崎の、ゆかりの芝居初様も(繪草紙)

「よるかり」縁許の義。縁。所縁。縁故の序云、巴太鼓・淨瑠璃・加賀藤正本(第二)に「いかさまこの子がゆかりか、ゆかりにもせよゆからぬにもせよ」とあるやうに、「ゆかり」を動詞に用ゐた例もある。曾根崎のゆかりの芝居とは、曾根崎に縁故ある芝居、即ちお初徳兵衛の曾根崎心中狂言をいふはつを見よ。

**ゆぎ** 「そびらにちのりのゆぎ云云」を見よ。

**ゆぎ** 引出す馬の力革ゆぎさき共にしつかと取り(加増曾我)



馬部(馬部)に「由木(又居木)・大由道(又居木)・由木(又居木)・由木(又居木)の長は鞍の作様に依つて少の長短可有、一様に不可有、大概は一尺一分或は一尺五六厘の事也。」